日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

災害看護「1.17メッセージ」からこれからの「進展」へ向けて：「災害看護メッセージ：備え」の発信

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-02-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日本災害看護学会, 社会貢献広報委員会, 浦田, 喜久子 メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/483

災害看護「1.17メッセージ」からこれからの「進展」へ向けて
「災害看護メッセージ―備え―」の発信

日本災害看護学会社会貢献・広報委員会*

阪神・淡路大震災から11年目の今年、毎年お届けしていた「1.17メッセージ」に代わり、日本災害看護学会より、新たに「災害看護メッセージ―備え―」が発信されます。

陽春の候ですが、昨年の多くの災害を思い起こすとこころが騒ぎます。去年も国の内外で大規模な自然災害が頻回に発生し、その被害は甚大なものがありました。被害発生のたびに、災害の際の医療と看護学を充実させていくことがいかに必要か痛感しております。

わが国の最近で最も大きな自然災害といえば、1995年1月17日の阪神・淡路大震災でしょう。6,433人の尊い「いのち」が失われました。このときの教訓を糧にして「災害医療のあり方」が検討され、そのお陰で大規模の災害援助が迅速、かつシステマチックに展開されるようにはなりました。しかし、災害時に現場で看護に携わる看護職に「災害看護の知識と技術」がどの程度、波及したかについて反省してみると、まだ、大きな課題を抱えているといえるでしょう。「ぶっつけ本番」で救護活動や避難所のケアなどの任務がおよぼす影響や危険性などからも災害看護に対する教育、訓練、研究などの重要性が強調されます。

阪神・淡路大震災のあとの1998年12月に災害看護の実践と災害看護学の発展を目指して日本災害看護学会が発足しました。以来、毎年、社会活動の一環として、「1.17メッセージ」を発信して参りました。災害を体験した被災地の人や救援にかかわった人は、「あの時」を振り返ったあと、「いま」と「これから」に提言をいただきたいというメッセージでした。これまでに語っていただいた17人のなかには、今も阪神地区に働いている看護師や、ボランティア活動を続けている人などもいて、今だからこそ口にできる胸のうちや抱え続けているジレンマなどを率直にうち明けて下さいました。これらは多くの人々の共感を呼んだと確信しています。

阪神・淡路大震災から10年が過ぎた節目を期に「1.17メッセージ」の見直しを致し、ひとつの役割を果たしたものと考えました。しかし、目下多くの災害の多発はただごとではありません。看護職者は関連諸機関と連携を密なものとし、災害に対する備えをさらに充実したものにしておかなければなりません。現在、地震予知は不可能といえるので、できることは「備え」だけです。「備え」として看護師が実行できることは、災害看護の質的向上と教育の充実であります。このために実践からの教訓や備えの具体的な事柄を「災害看護メッセージ―備え―」として発信できる場が必要であります。皆様には、今後も災害看護経験やボランティア活動の発信や、万が

*委員長：臼井千津　委員：浦田喜久子、小笹美子、黒田裕子、松下聖子、渡邊智恵

一、被災者としての体験やあれば「教訓」や「備え」は是非に広報して下さい。

最後に、これまで「1.17メッセージ」をお寄せいただきました皆様と掲載を快諾下さいました出版社の皆様に御礼を申し上げます。

今後とも、「災害看護メッセージ—備え—」をご支援下さいますよう、お願い致します。

語り継ぐことの重要性

兵庫県立大学地域ケア開発研究所　渡邊智恵

2005年の国連防災世界会議のテーマ別分科会でWHOのDr. David Nabarro氏が、スマトラ沖地震の被災者に対する心からの哀悼の意とともに、「防ぐことのできた死」がたくさんあったことをビデオメッセージで流した。彼は、災害の教訓を語り継ぐことの重要性、災害時にケアニーズの高い人々に対する対応策を検討する必要性を強調した。さらに、彼はスマトラ沖地震で、地震の後には津波が来ることを歌で親から子へと語り継いだ島では生存率が高かったことを紹介した。親が何度も繰り返し歌い、子供たちはその歌によって津波の時の対応の仕方を自然に学び、生き残ることができた。その歌は、地面の動き、津波が起こる前の海面の動きと、それに伴って高地へ避難するというものであった。

日本にも災害教訓の名作といわれる「稲むらの火」という物語がある。モデルは安政地震の際、紀州有田郡広村（現在は広川町）の出来事である。

「これまでに体験したことのない地震に、五兵衛は波が沖に沖へと動き、海岸が広い砂原に変わるのを見て、『大変だ、津波がやってくるに違いない』。そこで、一刻の猶予もならずと、取り入れるばかりのたくさんの稲に火を放った。『もったいないが、これで村中の命が救える』と。その火に気付いた村人は、火を消そうと急いで山手に駆け出した。火を消そうとする若者に、『そのままにしておけ。ほら、来たぞ』と五兵衛は言い、彼の指差す方向には、遠く海の端に非常な速さで押し寄せてくる細い暗い一筋の線があった。津波が百雷の落ちたようなとどろきで陸にぶつかり、人々は腰を抜かし後ずさりした。稲むらの火は、風にあおられさらに燃え上がり、夕闇に包まれ、あたりを明るくした。初めて我に返った村人は、この火によって救われたのだと気付いた」

「稲むらの火」は、スマトラ沖地震の影響で再び脚光を浴び、国連防災世界会議のなかで朗読された。現在は人形劇等で子供たちに上演されている。

自分の住んでいる土地の過去の災害に目を向けて、世代や時代を超えても、人々や社会によって語り継がれるような防災文化の育成が求められている。

日本では阪神・淡路大震災が災害看護の初発となり、さまざまな体験記としてまとめられ、継続した研究も登場している。一方で、語り継がれていない、あるいは記録に残していないものもあり、忘れ去られている災害もある。文字や歌、絵や写真を通してと表現方法は異なっても、災害看護の知恵や技をいかに後進に伝えていくかが問われている。

これまでの10年と今後に向けて

NPO法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク
理事長　黒田裕子

阪神・淡路大震災から11年が経過しようとしている。大都市で起きた直下型大地震は未曾有の被害をもたらしただけでなく、医療、福祉、地域社会、くらしのあり方も大きく変革させることになった。その理由に、6,433名の犠牲者の半数以上が高齢者であり、また、生き残った被災者の多くも高齢者という、世界でも初めての「高齢者型震災」であったことが挙げられる。「高齢者型震災」はコミュニティ

も弱体化するなかで、住民の生活支援、住民相互が支えあうコミュニティづくり、他職種・行政・住民との連携および、「協働と参画」を重要視して看護者の役割を展開した。展開した実践とそこから見えてきた課題を述べることとする。

1.看護者の役割と実践

1) 分野の壁を越えたネットワーク

いのちを原点として「暮らしと地域の一体化」を掲げ、各々のフィールドで市民主体の社会の形成を目指し取り組んできた。この取り組みの理念は「一人の人としてのいのちを重んじる」ことであった。震災後に遭遇した数多くの「孤独死」や「自殺」などは、忘れることができず、看護者の役割を問われたことでもあった。そこで、我々が呼びかけ人となり、地縁組織、行政(保健所、福祉課、まちづくり推進課等)、消防署、警察署、企業などとの連携をはかり、「子どものケア」「高齢者の見守り」「仕事づくり」「人づくり」などをテーマとし、問題解決に向けて役立つことができた。

2) 多テーマ型および多世代型の複合型コミュニティづくり

コミュニティの構成は「何でもありき」の多世代型で、そこに暮らす人々は多様な趣味や得意技や専門性を持っている「複合型コミュニティ」である。複合的で多様な資源が錦織のように重なったコミュニティづくりと、さらに知縁と地縁が連携できるよう、看護者がコーディネーターとなり、問題解決に向けて役立つことができた。

2.今後の課題

10年の活動を通して、「地域社会のあり方」「看護の再構築の重要性」「社会資源および福祉資源の有効な活用のあり方」等々、多岐にわたる課題が浮上した。課題の解決には、「ひと」と「くらし」を中心にすえて、政治的課題や社会システムの改善、地域社会を視野に入れた積極的な看護の姿勢が必要であり、また、社会も看護者に望んでいることである。

コミュニティづくりは平常時の備えであり、災害時の減災につながることを心しておきたい。

好評発売中

第36回日本看護学会論文集 全10冊

日本看護協会 編 ●各A4判 188～528頁 定価3,300円(税込)

日本看護学会論文集 看護総合 (好評発売中)
日本看護学会論文集 看護教育 (好評発売中)
日本看護学会論文集 看護管理 ('06年3月発売)
日本看護学会論文集 地域看護 ('06年3月発売)
日本看護学会論文集 精神看護 (好評発売中)
日本看護学会論文集 母性看護 (好評発売中)
日本看護学会論文集 小児看護 (好評発売中)
日本看護学会論文集 成人看護Ⅰ ('06年3月発売)
日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ (好評発売中)
日本看護学会論文集 老年看護 (好評発売中)

日本看護協会出版会 〒150-0001東京都渋谷区神宮前5-8-2 日本看護協会ビル4F TEL.03-5778-5751 FAX.03-5778-5760 郵便振替00190-8-168557